発掘調査の概要

飛鳥寺旧境内の調査（飛鳥藤原第197-6次）

2019年１月９日から３月１日まで、飛鳥寺旧境内の発掘調査をおこないました。調査地は安居院本堂の約160m北東にあたり、飛鳥寺の寺域東限を区画する施設の検出が期待されました。

調査区には古代の整地土が全面に広がり、この層の上面では、調査区のほぼ中央に石列１条、東端に石列３条を検出しました。

これより下層では、調査区中央部で柱穴１基と、大量の木屑や木製品などを含む落ち込みを検出したほか、東端の石列の下では柱根が残っている柱穴を１基検出しました。

出土遺物には、調査区中央部の落ち込みから出土した100点以上の削屑を含む木簡のほか、調査区全体から出土した飛鳥寺創建期の軒丸瓦を含む多量の瓦や、円面硯があります。

今回の調査は水路建設工事にともなうものであったため、調査区が限られており、検出した柱穴が南北方向の塀あるいは柵であるのかをあきらかにすることはできませんでした。しかし、２基の柱穴の東西には並ぶ柱穴が確認できなかったことから、飛鳥寺の寺域東限を区画する施設の一部ではないかとも考えられます。

調査区東端で検出した東西方向の石列に重複関係がみられることと、その石列の下で柱穴を検出したことからは、調査地一帯の土地利用が短期間に繰り返しおこなわれていたことがわかりました。

今回の調査によって、これまで調査が希薄であった飛鳥寺東部一帯の古代における様相をあきらかにするための手がかりを得ることができました。

（都城発掘調査部　土橋 明梨紗）

調査区東端の東西方向の石列（北東から）